

絵図・地図からみた池田市街地の景観変遷

地理班（徳島地理学会）

平井 松午¹⁾

要旨：池田市街地の形成は、阿波九城の一つである池田城（大西城）の小城下町、のちの郷町にその淵源が求められる。本報告では、近世後期に作成されたとみられる「池田古図」のGIS分析から、近世郷町の立地環境、ならびに明治期以降の市街地変遷について地形図・空中写真から分析した。

キーワード：GIS分析、池田古図、郷町、池田町

1. はじめに

天正13年（1585）の蜂須賀家政の阿波国入部後、西の抑えとして重臣の牛田又右衛門一長（のちに掃部尉と改名）が阿波九城の一つである池田城の城番となり、守兵300人が配置された（「阿淡年表秘録」、1～2頁）。慶長3年（1598）には牛田に代わり、鞆城（海部城）城番を務めていた中村右近太夫重勝5,200石（のち7,000石）が池田城番に任命された。池田城は、寛永15年（1638）の一国一城令により廃城となり、中村氏は徳島御山下に屋敷を移したのも三好郡奉行を務め、寛永17年（1640）には「仕置」職を命じられている。池田城の廃城後も、当地は讃岐・伊予・土佐に通じる要衝であったことから、池田城の置かれた上野台地下の字「宗安」に、東西68間、南北23間、面積4,564坪の池田陣屋が置かれた（『池田町史 上巻』237～238頁）。池田陣屋では、郡奉行（のち郡代）の代理である手代が業務を担い、軍事のみならず行政（民政）・警察・司法を司っていた。

阿波九城では城番支配の下に小城下町が形成され、藩内外から商工人を誘致して地子錢諸役を免除

する楽市政策によって、廃城後も郷町として発展していくケースが知られている（三好、2006、210～242頁）。のちに郷町として発展する「池田町（大西町）」についても、当初は中村氏によって讃岐などの隣国や近在から職工業者などの町人を池田町に集住させた政策が展開されたとみられている（『池田町史 上巻』466頁）。明治9年（1876）に編纂された『阿波国三好郡村誌』（徳島県立図書館呉郷文庫）によれば、池田町の字地は「町」（現在は「マチ」）のみで、その範囲は伊予街道（本道）沿いの東西12町、南北2町で西端は「古池」にまで及び、田11町4反5畝20歩、畠3町4反3歩、宅地7町2反9畝8歩、藪2町3反5畝13歩、合計24町5反2畝14歩を数えた。ただし、池田町の町並み自体は、この字地の東端部、すなわち現在の池田市街地が位置する河岸段丘上の東縁に位置した。なお、郷町「池田町」は地籍上は「池田村」の一部をなしたが、棟付帳などでは池田村とは別に「池田町」として町年寄支配地となっていた。本稿で用いる「池田町」は原則、この郷町を指すものである。

明暦4年（1658）の「棟付帳」との関連性が深いとみられる池田町の絵図（池田絵図A、図1）¹⁾を

1 徳島大学

* 〒770-8502 徳島市南常三島町1-1 徳島大学総合科学部

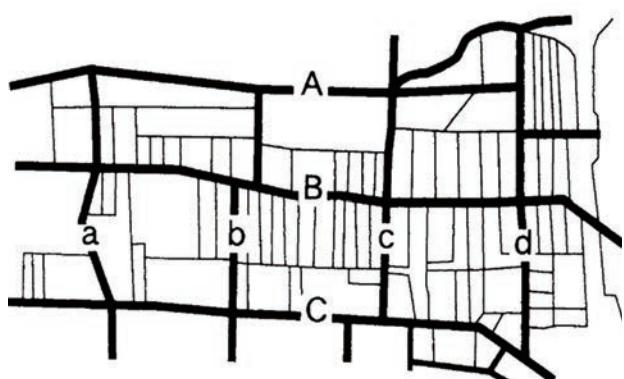


図1 池田絵図A
光井・和田（1999, 26頁）より転載

詳細に分析した光井・和田（1999, 24~27頁）は、
1) 初期の「池田町」は、蔵屋敷を起点とした東側
エリアに、本町通（伊予本道、図1中のB）と直交
する諏訪通（図1中のd）を設けて両側町として町
割されたこと、2) この両側町を御蔵の運営と関係
した商人（のちの「御蔵商人」）の居住区域とし短
冊状の屋敷地が設けられたこと、3) 池田に駐屯
した武家屋敷地と考えられる谷町通（図1中のA）・

中通（同C）周辺は廃城にともなう武士の減少に伴
い一部は裏町・新町となったが、大半は空き地・田
畠化したことを指摘した上で、当絵図が支城時代の
小城下町が崩壊し、在郷町化していく過渡的状況を
示すものであると位置づけている。

この池田絵図Aにはおおむね、東は池田町の東端
となる東町、西は庚申通（図1中のa）、北側は谷町
通、南は中通までの範囲が描かれているが、光井・
和田（1999）が「池田絵図B」とする「池田古図」
にも池田郷町の様子が描かれている。以下では、こ
の「池田古図」を手がかりに「池田町」の変容過程
について検討することにしたい。

2. 「池田古図」

「池田古図」（図2）は、藩政村である池田村全域
を描く村明細図ともいえる絵図である。『池田町史
上巻』などではその表記年代を天明年間（1781~
89）頃とするが、光井・和田（1999, 27頁）も指摘
するように、本図の表記・作成時期を天明期に特定

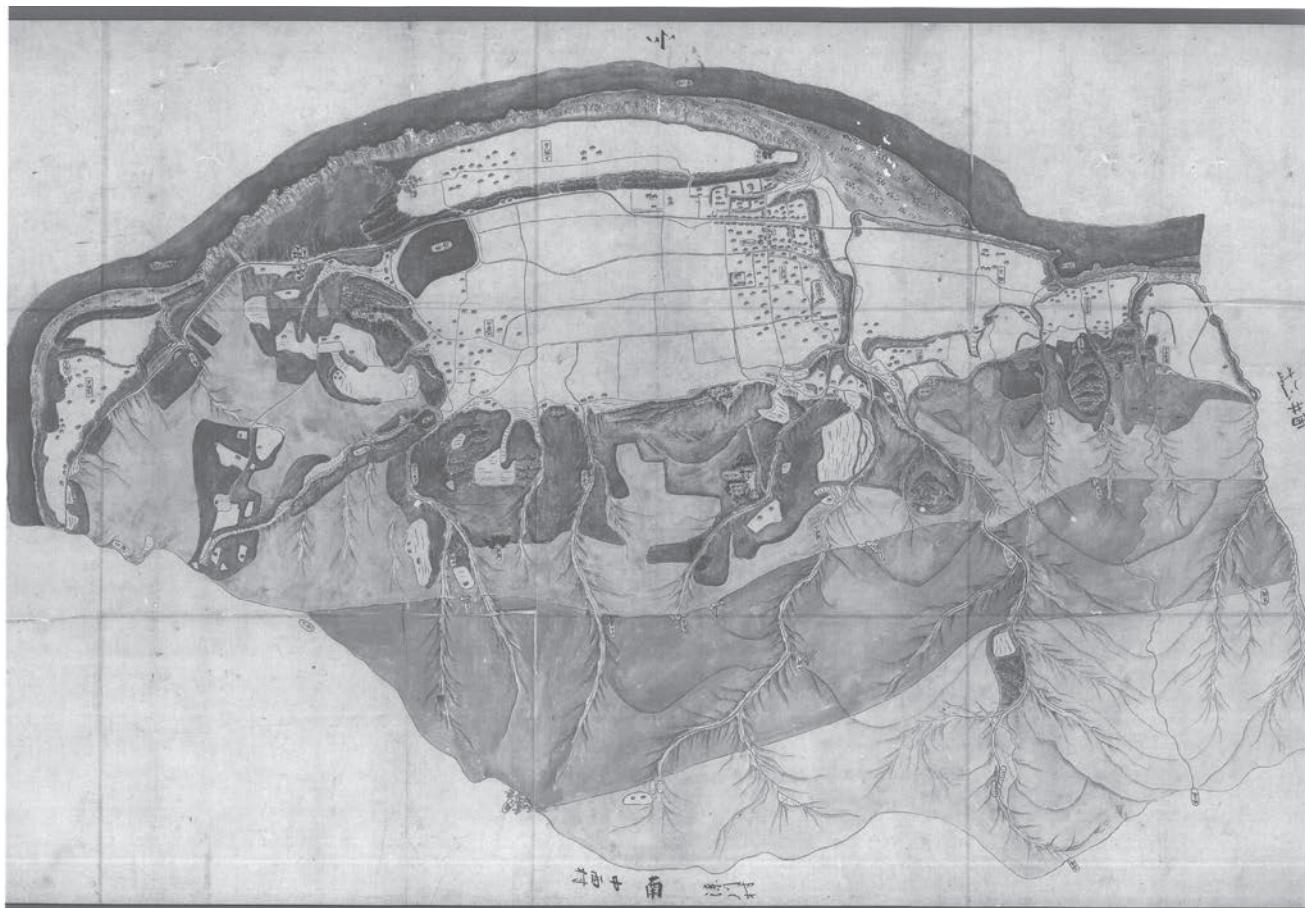


図2 「池田古図」（個人蔵、三好市教育委員会提供）

表1 池田村・池田町の戸数・人口推移

和暦	西暦	池田村			池田町		
		家数	男	人数	家数	男	人数
明暦4年	1658	153	377	..	78	247	..
延宝2年	1674	168	409	..	104	301	..
宝暦11年	1761	280	..	840
明和6年	1769	151	334	..
享和4年	1804	167	..	776
文化8年	1811	338	..	1,400	177	..	720
明治3年	1870	347	..	2,689	271	..	1,229
明治9年	1876	467	1,204	2,311	266	646	1,229

資料：平凡社地方資料センター編2008。

する積極的な理由はみつからない。光井によれば、旧池田町公民館に飾られていた「池田古図」の写真解説では、本図に記載のある「順慶坊」が常光寺に改称する弘化4年（1847）以前で、絵図に記された家数から18世紀後半の天明期と推定されているようである。また、古図に描かれている門構えの囲垣・堀を伴う武家屋敷が、寛延2年（1747）の祈祷札や武家門・玄関棟が現存する三好郡代（代官）を務めた旧間宮家とみられることも、その理由にあげられるのかもしれない。

池田村および池田町の家数については、表1に示したとおりである。仮に本図の作成年代を天明年間（1781～89）とすると、池田町を除く当時の池田村は300戸前後、池田町は160戸前後を数えたことになる。これに対して、「池田古図」において茅葺き家屋とみられる建物数は、池田町（字マチ）を除く旧池田村の14字（図中では「名」と記載）合計で232、池田町（字マチ）の建物数は90であった。この数は、「池田古図」において寺社関係の建物を除いて屋根が茶色で着色された茅葺き型家屋数を最大限に数えたもので、その中には納屋や蔵なども含まれている可能性もある。そうすると、「池田古図」に描かれる家数を絵図の表記・作成時期の根拠とするならば、その時期は17世紀後半か18世紀初頭のもう少し古い時期に設定されねばならないことになる。

他方、「池田古図」には、文化年間（1804～18）に徳島藩において作成が進められた実測分間絵図との共通点もみられる（平井2014a）。共通点としては、台地・段丘の景観表記が明瞭で山地が山吹色で着色され、実測分間絵図でも詳細に記載されている社寺名や地物名が橢円形の朱枠線を伴って記載されてい

る点などがあげられる。一部の建物が、築地堀や囲垣、門を伴って描写されている点も共通している。ただし、実測分間絵図では商家などの白壁土蔵が主屋と明確に描き分けられているが、本図に記載された池田郷町にはそうした白壁土蔵の描き分けはみられない。ちなみに、現在は確認できない「池田村実測分間絵図」などを編集して作成されたとみられる「吉野川分間絵図（仮称）」（個人蔵）には、「池田町」の名称が記載され、「順慶坊」のほかに台地上の「（池田）古城跡」「諏訪明神」や、「医家社」「桂林寺」、「役所」（桂林寺の南側）の名称をみることができる。

ただし、「池田古図」が写図としても、文化年間当時としては全国的にもみても極めて精度が高い実測分間絵図に特徴的な凡例や花形方位盤記号は用いられておらず、とくに南側の山地部では歪みが大きいなど、実測分間絵図の特徴と異なる点も多い。他方、南側の山地部の一部が東西方向に帯状に茶色く着色されている点も特異である。この帯状の北限線上には、「大岩」「大休場」「ソヲカ岩」「障子岩」「三ツ石」「クラ岩」「ツエノハナ」などの目印となるランドマークが東西方向に直線状に記載されるとともに、平地部と山地部境の山麓部や台地・段丘の方面、天王社（現在の丸山神社）西側の丸山一帯などが濃緑色で着色されている。これらの着色範囲が「御林」や「御藪」などの林野利用に関わるものかどうかは確認できないものの、本図作成の目的はこれら林野の表記にあるものとみられる。

それゆえ、本図が池田村の集落・田畠や池田町の正確な描写を必ずしも目的としたものではないとすると、先に述べた絵図中に描かれる家数と家屋（建物）数との差異は、絵図作成年代の特定作業においてさほど大きな問題にはならない可能性もある。むしろ、平地部においては絵図の歪みは小さいことから、絵図仕立ての観点でみれば、本図の作成時期をもう少し後の文化年間（1804～18）頃まで広げて考える可能性もあるのではないだろうか。

3. 「池田古図」のGIS分析

1) 分析手続き

このように年代特定が難しい「池田古図」ではあ

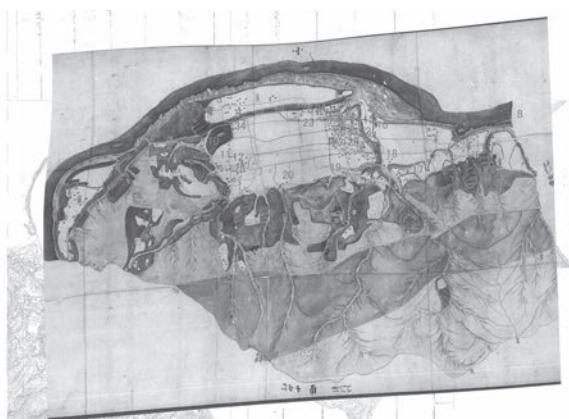


図3 幾何補正した「池田古図」

るが、本図が現在の池田市街地一帯をカバーしていることから、GIS（地理情報システム）ソフトを用いて本図を現在の地図に重ね合わせ、町場（市街地）景観の変遷について考察することにしたい。重ね合わせ作業は、GISソフト（ArcGIS）のジオリファレンス（位置補正・幾何補正）機能を用いた。

図3は、GISソフト（ArcGIS）上で「池田古図」の画像データと2,500分の1都市計画平面図（旧池田町が1978年に作成）を用いて、同一地点と同定で

きる36地点をコントロールポイント（CP）で位置合わせを行ったものである。「池田古図」の精度は必ずしも高くはないことから、「池田古図」と都市計画図との同一地点（CP36地点）の平均誤差（ズレ）を示すRMSエラーはアフィン（第一次多項式）変換では37.96mを示した²⁾。しかも、同一地点のCPを設定できたのは、最西端は板野名の「八幡宮」（現在の板野八幡神社）、東側は吉野川沿いの西井川村との境界、北側は上野名の「天王社」（現在の丸山神社）、南側は池田名の新池付近と堤名の弥柳川付近と、ほぼ現在の市街地部分に限られ、南側の山地部にはCPは設定できなかった。

ジエオリファレンス機能で絵図の幾何補正（位置補正）を行った場合、川や道路の交差点、寺社などが目印となって絵図の中央部ではRMSエラーの値は小さく、そうした同一地点が特定できない山間の周辺部ほどRMSエラーの値が大きくなる傾向にあるが（平井2014b）、「池田古図」でもこうした傾向が顕著である。例えば、絵図の周辺に描かれる板野名の「八幡宮」（現在の板野八幡神社）地点のCPの

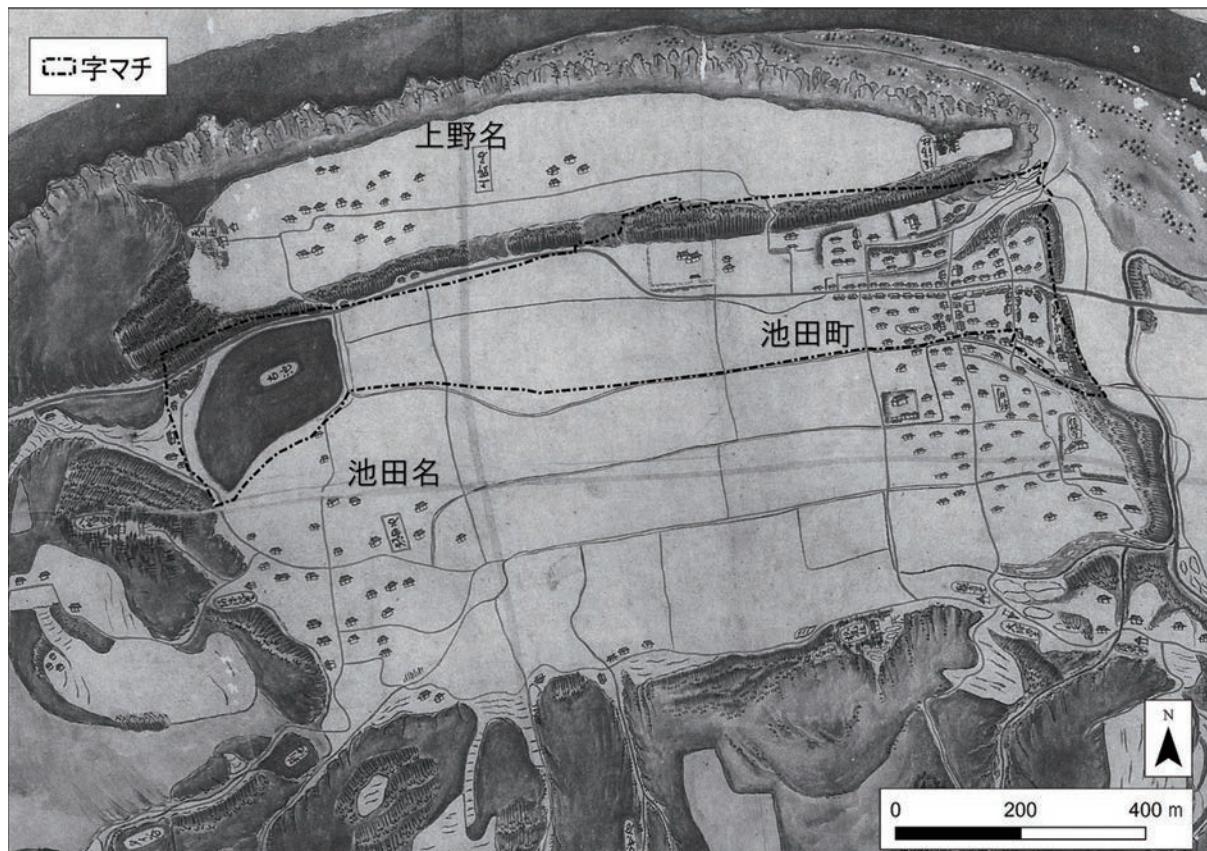


図4 「池田古図」集落部

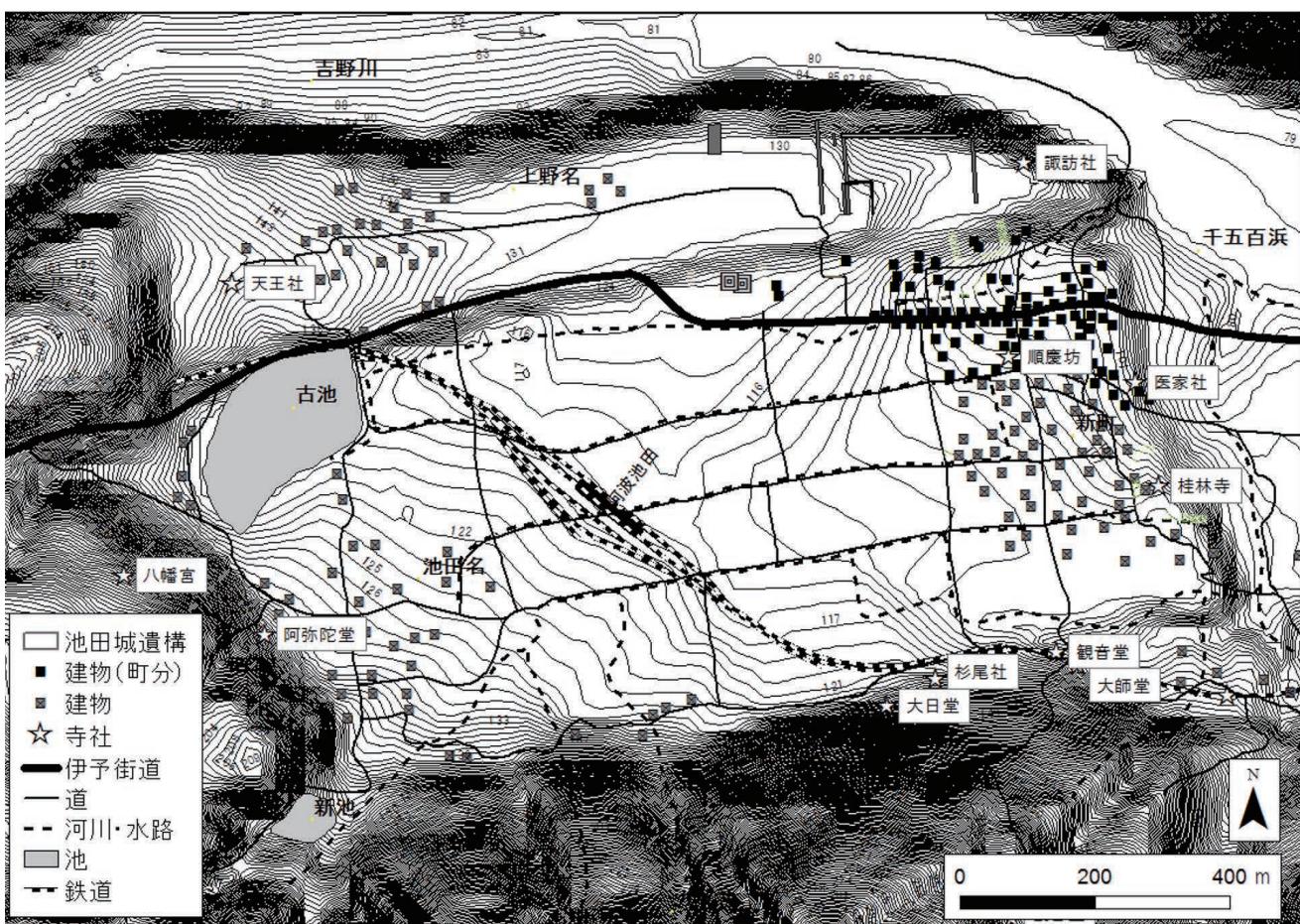


図5 「池田古図」のフィーチャーデータと標高

池田城遺構は徳島県教育委員会編2011、鉄道・標高データは基盤地図情報（国土地理院）により作成。

エラー値は109.74mと最も大きく、南に位置する「松尾社」（現在の松尾神社）地点のエラー値も62.37mと大きい。最もエラー値が小さいのは桂林寺から東西に延びる道路と戎子通との交差点（市道柳川線と市道戎子線との交差点）で1.88m、次いで桂林寺から東西に延びる道と諏訪通との交差点で5.79mであった。伊予街道沿いの本町通では、諏訪通との交差点が14.52m、戎子通との交差点が11.68m、杉尾通との交差点が13.96mである。それゆえ、「池田古図」を池田郷町・新町部分に限って位置補正すればより精度が高いことになるが、本稿では池田村と池田町との相対的関係をみるとことから、あえて「池田古図」全体の位置補正を行うこととした。

ちなみに図3は、アフィン（第一次多項式）変換によって幾何補正した「池田古図」の画像データを、さらにスプライン変換して誤差値をなくしたものである。その結果、36地点のCPについてはほぼ重なり合う（誤差値が0 m）ことになるが、絵図の画像

データそのものは歪みを帯びることになる。

2) 地形環境

図4は、そうしたジオリファレンス作業後における「池田古図」の集落部を示したもので、それにGIS上で字マチの小地域境界線³⁾を描き加えたものである。明治9年（1876）の『阿波国三好郡村誌』によれば、字「町」の範囲は東西12町、南北2町で西端は「古池」にまで及ぶが、本図によれば東西幅は約1,450m、南北幅は約250mで『郡村誌』の既述とおおむね合致する。集落は主に、上野台地上の「上野名」、新池付近の「池田名」、それに字マチ東端の「池田町」と三分される。

さらに、図5では「池田古図」に記載された地図情報（家屋・道・河川水路など）をGISデータ（フィーチャーデータ）化した上で、国土地理院の基盤地図情報で提供されている5 m間隔の標高データ（DEM）をもとに作成した1 m間隔等高線図と重ね合わせたものである。これによれば、台地上の上野

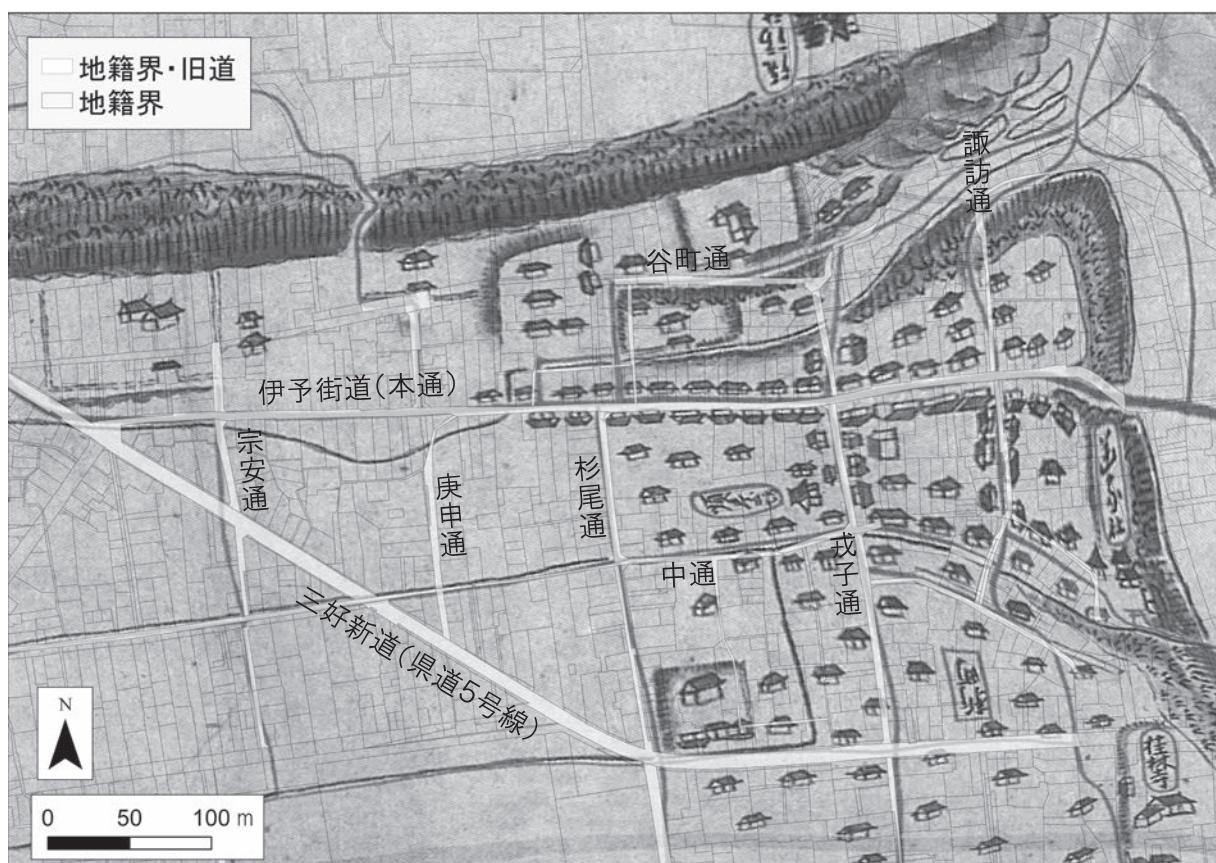


図6 「池田古図」の池田郷町付近
地籍界データは三好市による。

名の集落は、標高130~145mの崖錐上の緩傾斜地に立地していることがみてとれる。他方、池田名の集落は新池方面から流れ込む小河川がつくる小扇状地上に家屋が分布しており、周辺の田畠は古池から引水できず、新池が用水源であることが読み取れる。古池は、上野台地の中央構造線と四国山地とに挟まれた凹地の一番奥に位置し、古池を水源とする二条の水路は東流している。ただし、新池からの扇状地の押し出しもあって段丘面中央部は低い窪地をなし、窪地に溜まった流水は北東に流れを変えて段丘面の北東端で中央構造線崖下の河谷から吉野川に注いでいたものとみられる。一方、「池田町」(マチ)や新町(シンマチ)の集落は標高100~110mの東に向かってやや傾斜する段丘面の東端に位置し、郡代役所も中央構造線崖下の崖錐地形上に立地していた。このことから、中央構造線と四国山地とに挟まれた河岸段丘面は、小河川によって段丘面上を4つのパートに分断され、その凹地部一帯は低湿地をなし、長らく田として利用してきた。

ちなみに、絵図に描かれた池田古池の面積は

39,309.6m²（約4町歩）であるが、現在は埋め立てが進んで約4,700m²（約4反7畝歩）に過ぎない。また、大正3年（1914）3月には徳島からの鉄道（現在のJR徳島線）が延伸し池田駅舎が開設されるが、この池田駅舎や線路は段丘面上の小扇状地の縁に位置している（図5）。

3) 「池田古図」にみる池田市街

図6は、「池田古図」の池田郷町付近を示した地図で、現在の地番図データをもとに池田市街地の宅地割（地籍界線）を重ねたものである。また、「池田古図」では伊予街道（本道）は太朱筋線、道は細朱筋線で引かれていて、図6ではこれらの街道・道に相当するとみられる地籍部分を白色区画（50%透過）で示している。

既述のように、「池田古図」は南側の山地部で歪みが大きいものの、市街地中心部の歪みはさほど大きくはないことから、東西方向に延びる伊予街道（本道）や中通だけでなく、南北方向の諏訪通、戎子通、杉尾通、宗安通も多少のブレはあるもののおおむね現在の地番図（地籍図）で比定できる。先に

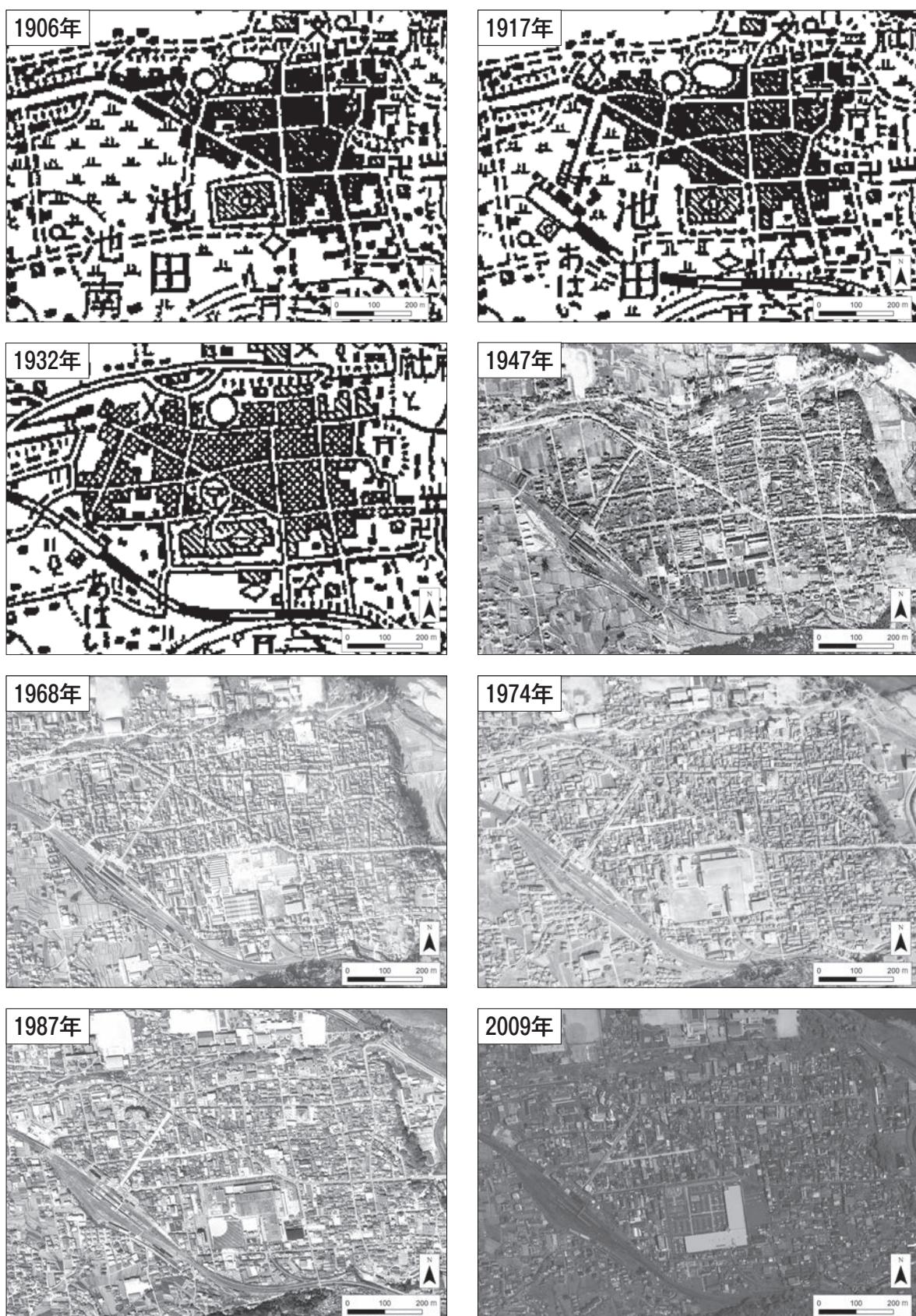


図7 池田市街地の変遷

出典：1906年図（明治39年測図、1/5万地形図「池田」）、1917年図（大正6年鉄補、1/5万地形図「池田」）、1932年図（昭和7年鉄補、1/5万地形図「池田」）、1947年図（米軍撮影空中写真1947CA-54）、1968年図（国土地理院撮影空中写真1968C 9-14）、1974年図（国土地理院撮影空中写真MSI742X-C 6-15）、1987年図（国土地理院撮影空中写真1987C 5-12）、2009年図（国土地理院撮影空中写真2009C12-10）、いずれも国土地理院提供。

紹介した図1の城下絵図Aでは、aの庚申通周辺にまで町家の地割が確認できるとされるが、「池田古図」では伊予街道（本通）に連続する町家は庚申通までには達していない。先に紹介した文化年間（1803～18）以降に作成されたとみられる「吉野川分間絵図」（仮称）でも、伊予街道（本通）沿いに描かれた家並みの範囲は「池田古図」とほぼ同じである。城下絵図Aは明暦4年（1658）頃の絵図とみられることから、そうすると「池田古図」が作成された江戸後期には郷町の範囲が縮小したことになる。ただし、池田町の家数は明和6年（1769）には151戸だったものが、文化8年（1811）には177戸を数え、郷町が拡大している様子がみてとれる（表1）。こうした状況を踏まえると、城下絵図Aや「池田古図」の作成年代については再考の余地があると思われるが、ここではこうした課題を指摘するに留めておきたい。

4. 明治期以降における町並み景観の変化

幕末～明治初期にかけて池田町は煙草製造業が活況を呈し、明治3年（1870）の家数は一気に270戸を超えるまでに発展し、大正3年（1914）の鉄道（現在のJR徳島線）開通、昭和4年（1929）の土讃線開通以降は交通要地としての地位を高め、地方小都市として成長することになる（土井1952）。その結果、明治22年（1889）の三好新道の開通や大正3年の鉄道敷設、駅前通の開通に伴い、駅舎を中心とする新市街地が形成され、千五百浜の川湊と伊予街道との結節点として発展してきた池田郷町（旧市街地）の商業中心性は失われることとなった。

こうした池田市街地の変容過程を5万分の1地形図や空中写真で示したのが、図7である。明治39年測図の1906年図では三好新道付近まで市街地が拡大し、新道南側にはその前年の明治38年（1905）に官営の煙草製造所の工場が設置されている。1917年図では、大正3年（1914）の鉄道開通に合わせて駅前通が新設された。その結果、1932年図では駅前通や三好新道南側に市街地が拡大している。第二次世界大戦後の1947年図は米軍撮影の空中写真である。旧伊予街道沿いの本町通や三好新道沿い、駅前通のほかに、中通～駅前通、煙草製造所北側に新設された

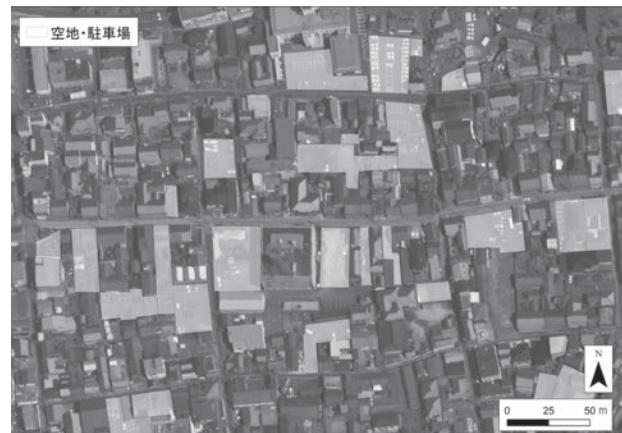


図8 池田本町通付近の空地・駐車場の分布

栄町通に商店街が形成されている。1968年図・1974年図の空中写真では駅西側地区でも住宅地化が進行し、1987年図では段丘面上の大半が市街地化されている。平成2年（1990）には煙草製造所の後継であった日本たばこ池田工場が廃止となり、JT関連会社の電装工場となったが2003年には閉鎖され、現在跡地は商業施設が立地している（2009年図）。

5. おわりに

伊予街道沿いの郷町「池田町」は往時の景観を残し、「うだつの町並み」として伝統的建造物保存対策調査も行われてきたが（うだつ編集委員会編1995），重要伝統的建造物群保存地区などの文化財指定に至っていないのが現状である。しかしながら、この間、字マチ地区の戸数・人口は減少し、その結果、空地や駐車場が拡大してきている。

図8は、2009年国土地理院撮影の空中写真をベースに、GoogleMapで確認できた空地と駐車場をポリゴンデータとして表示したものである。かつては本町通（伊予街道）沿いに連続して商家が軒を並べていたが、空地や駐車場の増加に伴い、こうした連続的な町家景観は失われつつある。さらには、現代風の建造物に建て替えられた民家や空き家となっている古民家もあり、歴史的な町並み景観は大きく変わろうとしている。

しかしながら、往時の面影を残す古民家もまだ残されており、最近ではこうした古民家を活用した地域活性化も模索されている。こうした活動を通して、郷町「池田町」の歴史を再認識するとともに、歴史的景観を生かした地域再生を期待するものである。

注

- 1) 三好郡郷土史研究会・池田町教育委員会編『三好郡資料集
1 池田町棟付帳』に収録される絵図であるが、筆者未見。
- 2) 岡崎三蔵系の実測分間絵図である文化11年(1814)6月改正の「阿波国那賀郡岩脇村絵図」(徳島大学附属図書館蔵)の場合には、51地点のCPのRMSエラーは10.18mであった(平井2014b)。
- 3) 字の境界線は、総務省統計局の境界データ(小地域)を用いた。<https://www.e-stat.go.jp/gis/statmap-search?type=2>

参考文献

- 池田町史編纂委員会編(1983)：『池田町史 上巻』池田町。
うだつ編集委員会編(1995)：『うだつ 商都池田の伝統的建造物(I)』池田町教育委員会。

- 土井仙吉(1952)：地方小都市の成長過程—阿波池田町の場合—。人文地理, 4-2, 24~37頁。
- 徳島県教育委員会編(2011)：『徳島県の中世城館 徳島県中世城館跡総合調査報告書』同会。
- 徳島県史編さん委員会編(1964)：『徳島県史料 第一巻 阿淡年表秘録』徳島県。
- 平井松午(2014a)：徳島藩の測量事業と実測分間絵図。平井松午・安里進・渡辺誠編『近世測量絵図のGIS分析—その地域的展開—』古今書院, 77~98頁。
- 平井松午(2014b)：実測分間絵図の精度に関するGIS検証。平井松午・安里進・渡辺誠編『近世測量絵図のGIS分析—その地域的展開—』古今書院, 99~111頁。
- 光井渉・和田英樹(1999)：『徳島県池田町 うだつの町 阿波池田』池田町・池田町教育委員会。
- 三好昭一郎(2006)：『近世地方都市成立史の研究』私家版。

Changes of the Historical Landscape of Ikeda Country Town in Awa Province from the Results of the GIS Analysis Using the Old Maps

HIRAI Shogo

* 1-1, Minamijosanjima-cho, Tokushima 770-8502, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No.62(2019), pp.125-133.

